

# ナースイン花びりか

**症 例 概 要** 利用者氏名：Y.Y様（女性・90代・要介護度4）

病名：左大腿骨頸部骨折の術後、洞不全症候群、ペースメーカー植え込み後、慢性腎臓病、高血圧症

経過：夫が死去後、市の職員として定年まで勤務していた。退職後は海外旅行に一人でも行くなど活動的だった。H27年2月下旬自宅で独居生活をしていたが、トイレに行く際転倒。左大腿骨転子部骨折と診断され保存的療法後、ご本人、ご家族共に自宅生活困難と判断し、H29年3月 長男宅の近いサ高住花びりかに転居される。H30年4月花びりかで転倒し左大腿骨転子部骨折にてS病院入院。人工骨頭置換術施行。

その後は花川病院の転院を経てH30年7月下旬に退院後、当事業所サービス開始となる。利用当初から「病院にはもう行きたくない、ここで死にたい」と発言されていた。R1年6月下旬より、痰絡み咳を発症し食思減退。ご本人、ご家族希望にて同月下旬より終末期ケアへ移行し、11月下旬にご本人の希望通りサ高住自室にて最期を迎えられた事例。

## 内 容

ご利用当初より、「もうやり残したことはない、死んでもいい、早く楽になりたい」等の発言があり、自室で過ごす生活を好まれていました。サービスは訪問が中心で介護が5回/日、看護が1回/月、入浴や栄養管理、活動性の向上を目的に通所2回/週を利用されていました。起床時や就寝前には温タオルで洗顔し化粧水を付けくしで髪をとかず習慣を欠かさず、倦怠感が強い時でも身だしなみに気を遣われていました。

H31年3月末頃より徐々に食思減退、体力低下がみられ食事もベッド上で摂ることも増えてきました。体調面については看護師が訪問診療看護師、医師と情報交換を行い、R1年6月、医師によるICを施行。長男よりご本人の意向を尊重し積極的な治療は望まないと希望され、終末期ケアへ移行。

通いはご本人の希望で1回/週に減らしましたが、訪問サービスは介護6回/日、看護1～2回/日へ増回、福祉用具も床ずれ予防マット、体位交換枕を追加し花びりか住宅の職員を交えてポジショニングや口腔ケア方法について確認を行いました。食事は減少しておりましたが、ご本人が食べたいと希望されたカレイの煮つけやホワイトシチュー、トマトなどを長男が持参したり、嗜好品であった栄養補助ドリンクを管理栄養士がゼリー状に作り提供する事で少量ながらも経口からの摂取を継続しておりました。

R1年8月、嘔吐後発熱がありCRP上昇。長男より苦痛緩和ができるのであればと一時的に抗生剤を滴

下投与し炎症反応は改善。この頃、長男にも「このまま枯らすしかないのか、何か治療した方が良いのではないか」といった発言がみられるようになりましたが、ご本人の意向を再確認しながら話し合うことで終末期ケアの継続を希望されました。身だしなみを最後まで気にされていたため、毎日起床、就寝時の化粧水は欠かさないように介助し、洗身は二人介助でストレッチャー浴と全身清拭、整髪は自室で散髪してきれいな姿を保たれておりました。

R1年11月中旬、血圧、SPO2低下、体温上昇がありご家族へ報告。疎遠関係にあった長女が同室で宿泊をされ、1晩一緒に過ごされておりました。翌日、午前に長男夫婦、長女に看取られながら自室にてご逝去されました。ご家族からは「これだけやっていただいて本人も満足していると思います。最期に一緒に過ごせてよかったです」との言葉を頂き、ご本人とご家族が望まれていた形で終末期ケアを実現できた症例として賞に値すると思ひ推薦します。